京都外国語大学能楽部ＯＢ会機関紙　　第22号　　昭和63年11月21日

ＯＢ会だより

第22号

京都外国語大学
能楽部
ＯＢ会

《昭和六十三年度　ＯＢ総会を終えて》

――去る八月七日（日）、昨年に引続き京都・コミュニティ嵯峨のにおいてＯＢ総会が催された。――

開会に際し橋本礒道先生よりご挨拶をいただき、その後、昨年度のＯＢ会会計報告が行われた（詳細についてはＯＢ会だより前号を参照）。続いて、かねてから危惧されていた大学側からの能楽部に対する援助金が今年度より削減されることをうけて、その現状説明と今後の対策について話し合われた。しかし、金銭に係わる経済的な問題であるために決定的な打開策が得られず、この総会のみに限らず、ＯＢ会全体の課題として考えていくことが必要とされた。また、こうした外大能楽部ＯＢ会に関する諸活動（ＯＢ総会、ＯＢ交歓会、外大能など）への会員の参加を促すためにも、各卒業年度のＯＢ会員の中から連絡委員（仮称）を選出してはどうかという提案もなされた。一方、決議事項としては、毎年のＯＢ総会の世話役は現役卒業後、ＯＢ会員となって二年目の方々に当番制でお願いすること、またＯＢ会の運営便宜上、幹事として松波浩之氏（六十年度卒）、会計補佐として藤原浩晃氏（六十年度卒）をおくことなどが決まった。

――今回、出席された方は橋本先生ご夫妻を含めても七名と非常に少なかった。昨年の総会でも、ＯＢ会活動のより一層の活性化を図ろうという呼びかけがあったにもかかわらずこのような状況では、援助金の削減などの様々な問題をかかえながら、ごく限られた者だけが頭を痛め悩むばかりである。外大能楽部ＯＢ会も五十余名の会員を有しながらも、その組織・活動は形骸化していく兆しが見えるようでならない。今一度、現役当時を思いおこして新しい息を吹き込むような、そんな会員諸氏の参加を願って止まないこの頃である――

《第二十五回外大能ご案内》

前号でもご案内いたしましたとおり、来たる十二月十日（日）午前十時半より、河村能舞台におきまして第二十五回外大能が行われます。番組、ご案内状は現役部員より発送されますが、とりあえず曲目・演者をお知らせいたします。

能楽
「井筒」　前シテ　姫野　博子
　後シテ　小濱　英子
「猩々」　シテ　福本　一朗

舞囃子
「高砂」　田中　幸彦
「鶴亀」　河島　陽子
「敦盛」　小笠原　昌代
「熊野」　米好　由紀
「芦刈」　川島　裕美子
「三輪」　伊藤　朋子
「野守」　増田　勝彦

仕舞（三回生）
「小鍛治」　勝又　和弘
（二回生）
「難波」　西田　典子
「屋島」　大橋　美江
「松風」　石戸　敬子
「天鼓」　小松原　直子
「玉之段」　明石　麻弓
「融」　西嶋　美佐
（一回生）
「杜若」　田上　早恵子
「胡蝶」　塚越　久美子
「羽衣」　小畠　貴久香
「花月」　飯田　かおり
「蝉丸」　岩本　美砂
「玉鬘」　石毛　純子
「班女」　池谷　恵美
「放下僧」　真喜志　尚子
「松虫」　宮田　紀江
「大江山」　久保　奈弓

連吟「竹生島」　部員一同

素謡
「橋弁慶」　「吉野天人」　「土蜘蛛」

ＯＢ連吟「菊慈童」
ＯＢ仕舞
「経正」　柴田　圭一
「邯鄲」　角　孟典

番外仕舞
「鐘之段」　橋本　雅夫　先生
「鵜之段」　橋本　礒道　先生

能楽部の年間の最大行事である外大能に、ＯＢの皆様にも多数ご参加いただき盛大な催会にいたしたいと存じますので、是非ともご来場くださいますよう宜しくお願い申し上げます。

《第十五回聲壽会能公演ご案内》

橋本聲壽会主催・京都市後援による第十五回聲壽会能公演の日程が左記のとおり決定いたしております。皆様お誘いあわせのうえご来場ください。

日時　昭和六十四年一月二十二日（日）
　　午後十二時　開演

場所　京都観世会館（京都市東山仁王門東入）

番組　「鉢木」　橋本　擴三郎　先生
　　「遊行柳」　橋本　雅夫　先生
　　青柳之舞
　　「葵上」　橋本　礒道　先生
　　空之祈



《ミニミニ告知版》

この夏、八月二十日（土）付の毎日新聞掲載〝京都創生人〟というコーナーで、橋本雅夫先生、礒道先生、擴三郎先生が能楽師三兄弟として紹介されました。幼少の頃から能に親しんできた先生方の今日までの道のりが、おぼろげながら伺えるような気がします。



京都創生人

あなの1000人

題字は書道家　西野象山さん　115

三兄弟

名人に近づく



橋本　雅夫

観世流シテ方として活躍している橋本雅夫㈼、磯（いそ）道㈽、擴（こう）三郎㈿さんの三兄弟。三人三様の個性に磨きをかけ、次代を担っている。

祖父の代までは、祇園祭八幡山の鉾町、中京区新町三条で六代続いた呉服商家だったが、父の故仁一郎が観世流シテ方の井上家に弟子入りした。ただ仁一郎は素謡（すうたい）専門で、「息子は、舞のやれるシテ方に」と願った。その父の思いを一身に背負った長兄の雅夫㈼は、五歳で子方として初舞台を踏み、八歳で初シテ「経正」を務めた。子供のころと同時に仁一郎の指示で母が「能楽師にします。絵描きにしないように」と担当の先生に言いに行ったという。

化庁（能楽総合）保持者の指定を受け、五十九年春、京都市芸術新人賞を受賞。そして同年十二月、初舞台四十周年記念に京都能楽会で三十年ぶりという「独調」に、「それまで、能をやめる人は年寄りが多かったが、大学で能に興味を持つ友人と出会った」ことで

「現代の学生は、よく新しい人類と言われるが、能楽部の学生は相変わらずまじめで、板間で正座するなどのけいこの時も忍耐強いですよ」

兄雅夫と第擴三郎は父が師事していた井上家に弟子入りしたが、磯道は職分家の一つ、片山九郎右衛門に七年間、内弟子修業に入った。雅夫がスケールの大きい能を演じるのに比べ、磯道は「刃物を感じさせるような技の切れを見せる役者になりたい」と握負を誇る。

「兄二人が継いでいるし、心の中では能楽師に進むことを決めていたが、卒業まで言い出せなかった」と言うが、能に寄せる情熱は二人の兄にもひけをとらず、いっしょに社中「橋本雅吟社」をもり立てている。

「二十代は表面的なものしか見ていなかったようで、考えが浅かった。立っているだけで、にじみ出てくるものがなければ、と思い続けています」。最近、能だけでなく、インド舞踊もよく見る。「観者と観客、一瞬の火花を散らして終わるところがいいですね」とその舞台にほれ込み、独自の芸風を模索している。

（敬称略）（つづく）

能・狂言　③



橋本　磯道

次弟の磯道は三歳で初舞台を踏んだが、「子供のころ、能は好きではなかった」と言う。しかし、京都外大に進んだ三十六年、観世会館で開く公演も十四回を数えた。

一七五六、八〇。の堂々六十番に達し、同世代では三番能」を成し遂げた。一番続けて演ずることは、精神的、体力的に激しい消耗を強いる。雅夫の充実ぶりがうかがえる会心事だった。

演能数は、観世流の現行曲二百番余のうち年内に百二十番に達し、同世代ではトップクラス。

「能の質を落とすのではなく、私たちが観客の方に寄って行き、親しめるものにしたい」と能の普及のために五十年に三兄弟で「再現会」を発足、毎年正月に観世会館で開く公演も十四回を数えた。

一七五六、八〇。の堂々たる体格、体格的には「安宅」の弁慶などが楽なのでしょうが、女物がいい、と言われます。本来、自分にむずかしいものを演じ、自身をいじめていることでいい面が出るのでは」と言う。将来は「子供のころに武者震いを感じた名人たちに伍してゆきたい」と夢は大きい。

能楽研究会を発足。研究会は、能楽部に発展、現在部員三十人。いまも月に三回、師師として指導を続けている。



橋本擴三郎